東日本大震災　関連情報（第 14 報）

平成 23 年 5 月 11 日
全国老人クラブ連合会

●東日本大震災に関する、老人クラブ関連の情報をお伝えします

１．震災後１か月を経過した、被災老連からの状況報告を提出いただいていますので、添付いたします。（４回目・最終）

〇千葉県老連　(被災地地震情報参照)

２．岩手県被災地訪問報告

全老連では、岩手サポート班幹事県である秋田県老連とともに岩手県老連を訪問。その後、県老連とともに被災地を訪問しましたので、別添により報告します。

●「被災県別サポート班体制」の変更について

岩手、宮城、福島、茨城・千葉の４つのサポート班体制を編成しましたが、このたび千葉県老連より、甚大なる被害のあった被災地を優先させて欲しいという辞退がありました。今後は「茨城サポート班」に変更いたしますのでご承知おきください。

●支援活動

１．元気袋情報

新潟県老連から子ども向け元気袋作成の情報が下記のとおり、また京都府老連から京都新聞に掲載された元気袋作成の記事が届きましたので添付いたします。

✧ 子ども向け元気袋を作成　〔新潟県村上市　村上支部老連〕

支部老連では義援金以外にも真心を伝えたいと考え、テレビ報道でも避難している子どもの姿が目についたことから、子ども向け元気袋の作成を呼びかけました。手作りの袋に子ども向けの物を詰めて、手書きのメッセージカードを入れています。当初予定した２５０個を上回る、８５０個が完成しました。まず、村上市内に避難している福島の小学生１１名に届けたところ、思いがけずかわいらしい礼状をいただきました。今後も新潟県内に来ている子どもたちや被災地の子どもたちへ早く届けていきたいと思います。

（事務局長　竹内　友二）

２．被災地に向けての体操

「いきいきクラブ体操」をデザインした武井正子先生が、被災地に向けて「ほぐれる体操」を作りました。岩手、宮城、福島を中心に「久光製薬」のコマーシャルで放送されます。またサイトが開かれていますので、他の地域からは「ほぐれる体操」で検索すると、４つの体操を見ることができます。

「“カラダが少しほぐれると、こころも少しほぐれるネ”をキャッチフレーズに、皆さんに元気になっていただきたいと思っています。」（武井先生）

岩手県被災地訪問について（報告）

東日本大震災から約２か月となる岩手県の被災地を訪問し、現地の老人クラブ関係者の声を直接聞く機会を得た。その状況を次のとおり報告する。

１．期　日　　平成２３年５月５日～５月６日

２．参加者　　秋田県　戸嶋事務局長、田口活動推進員
　　全老連　齊藤事務局長、岡本参事
　　岩手県　野辺地次長、七尾（元職員）

３．打合せ会

・　５月５日１６時から、県老連事務局にて、岩手県老連　金野事務局長、野辺地次長と参加者の顔合わせと現況説明、翌日訪問の打合せ。
・　訪問先の宮古市、山田町、大槌町、釜石市の状況をはじめ、被災１３市町村の状況は、すでに岩手県老連の調査による資料が取りまとめられ概要が把握できている。
・　そのなかで、老人クラブ会員の安否情報等の把握はいまだ困難な状況にあり、いま少しの時間を要するものと思われる。その要因は事務局機能の低下、リーダーの不在、現地の混乱等がある。
・　事務局の廊下には県外老人クラブからの元気袋（約４００）が段ボール箱に入って届けられていた。
・　岩手県老連　菅野会長、盛岡市老連　斎藤会長とは盛岡市内でお会いした。
県老連役職員の士気は高く、被災地との一体感を感じるものがあった。

４．現地訪問

・　スケジュール（５月６日）
　盛岡発⇒　①宮古市（金浜老人福祉センター、仮事務所、避難所）⇒　②山田町役場　⇒　③大槌町中央公民館　⇒　③釜石市（港、海員会館、事務所流失現場）⇒盛岡着　（走行２８５キロ）

【①　宮古市の概況】

・　漁港周辺の空き地に撤去された瓦礫が小高い山のように積まれていた。市役所はじめ市内の鉄筋ビルは２階まで浸水。ガラスが壊れたためか板が打ちつけられていた。市の中心街は浸水はあったものの、比較的軽微な被災のように思われた。
・　訪問した金浜老人福祉センターは小高い山の上にあり被害を免れ、現在避難所となっていた。出迎えてくれた木村会長は被災がなかったが、山内副会長、柳沢事務局長は家屋に被災を受けている。
・　合併した田老地区を含めて６１クラブ中、２９クラブが被災している。会員の安否確認はまだ手がつけられていない。事務局長の柳澤氏は避難所の業務に忙殺され、

老人クラブにまで手が回らない状態であるが、近々避難所も統合されて本来のセンター業務に戻れれば、現況調査も可能との考えであった。

- 宮古市にはほかに磯鶏老人福祉センターがあり、柳澤氏は被災当日そこで勤務して被災に遭遇した。利用者をすぐに帰宅させ、利用者は無事であった。また日頃から避難所は住民が訓練で確認しているため、同地区に住まいがある山内副会長も避難して事なきを得た。
- 山内副会長は避難所で３日過ごしたが、自宅２階が無事であったため、現在は自宅で生活している。不自由ななかで私たちを迎え入れるために、手作りの郷土菓子を用意してふるまってくれた。また、岩手県老連から届いた元気袋を女性部の手を借りて分類して配付したとのことであった。
- 柳澤事務局長は、被災者は県外に避難したり、転居したりして所在を把握するもの時間を要する。また老人クラブ活動を考える余裕はない。町内会も壊滅的な状態であるので、老人クラブの維持の可能性も悲観的な気持ちを吐露した。
- 事務的には濡れた書類は残っているが果たして使えるかどうかは不明。せめて単位クラブへの補助金は何とか確保して再興に結び付けたいとのことだった。高齢者の一人暮らし所帯も多く、宮古市の人口減少は避けられないとも言う。
- 仮設住宅はまだ計画段階が多く、最終的には５２か所、１５１０世帯が予定されている。センターに勤務する２名の女子職員によると自宅は無事であったが、勤務先で車は流されたとのこと。好天に恵まれたこの日、玄関わきには拾い集めたアルバム、写真を干していた。

【②山田町】

- 人口 19,500 人で被災を受けた世帯は 42%に及ぶ状況である。中村会長、阿部副会長、社協の五十嵐担当者が出迎えてくれた。
- 町の中心部は荒涼とした瓦礫地帯。役場の所在を知らせる標識もなく、町を通り過ぎてしまい後片付けする住民に尋ねて役場へと向かう。役場は小高い場所にあって難を逃れた。津波のあとには火災も発生。車に引火して拡大したとのことで、痛ましい焼け跡が残っていた。
- 玄関先のロビーに車座になって話を伺った。明治、昭和の津波被害で高台に転居した地域は被災を免れた。津波到達予定地域の標識があったが、見事にその付近まで被害が及んでいた。
- 標識のある下に町全体が構成されている。阿部副会長は床下浸水、担当者の五十嵐氏は祖母・母親を亡くしている。仮設住宅は５月下旬に 1900 戸準備中。
- 医療機関は県立山田病院の１か所で、患者が多くパンク状態で本来なら入院が必要な人でも、最重症患者のために退院を余儀なくされている。
- 車両通行のために道路だけは清掃されているが、信号も標識もなく、自衛隊の車両が頻繁に行き交っていた。北海道から静岡県から大型バスでの支援が入っていた。

【③大槌町】

・　被災地での昼食は困難と考えていたが、海岸を見下ろすドライブインが開いていた。被災当日は海の底が見えるほど海水が引いたのを従業員は目撃したそうである。

・　大槌町の柳田会長は自宅が全壊のため、子供のいる盛岡市に転居し、しばしば県老連を訪れて情報と伝えている。地元の副会長、女性委員長と 3 人で出迎えてくれた。また、釜石市の副会長、横山事務局長も合流して、ともに昼食をとった。

・　柳田会長の説明と案内を受けながら、秋田県五城目町の老人クラブ会員が旅行中に被災したホテルに立ち寄った。風光明媚な場所に立ったホテルは建物の外壁は残っているものの、内部は流失して何もなかった。ホテルの社長、女将はいまも行方不明である。天皇陛下も宿泊されたホテルとのことだった。

・　国道から急坂を下りたところに大槌の街が広がっていた。見渡す限りの廃墟である。マスコミでも放映された町役場は町の中心部にある 3 階建ての庁舎で大きな時計だけが残されていた。

・　大型船が山裾に横たわる姿は、この町が一瞬に海の底に沈んだ様子がうかがえる。行政機能がマヒした状態もあってか、被災を受けた町の復興の様子も微妙に異なるものがある。堤防は決壊し、鉄道や駅舎は流され、大槌―盛岡間のバスが 1 日 2 往復が運行されていた。柳田会長は片道 3 時間で盛岡に帰るとバスに乗り込んだ。

【④釜石市】

・　大槌町からは釜石の横山会長が先導してくれた。自らは自宅が全壊、濁流の中で命拾いした。釜石港の隣、海が目の前に広がる海員会館の一室を借りて、独立した事務局体制で運営をしてきた。外壁は残っているが何も残っていない様子だった。釜石の旧市内は狭い空間に建物が多く、鉄筋の建物は形をとどめていた。

・　横山事務局長の自宅は完全に崩壊。高台の避難所となっている市民センターは車が登れるかと思うほどの急坂で、公共の建物がこのような場所に立てなければならない土地環境を思い知らされる。

・　市民センターには現在 80 人ほどが避難している。水が出ない状況が続いている。屋外でたばこを吸っていた高齢者に話しかけると、温かい食べ物を腹いっぱい食べたいと訴えた。そのことは事実であるが、移動手段があれば同じ市内でも被災に合わない地域では店舗は営業している。息抜きをできる環境にある避難所も少なくないのではないか？とも感じた。

【被災地域の人々】

・　訪問した先々の老人クラブ関係者は、共通して能弁であった。被災から約 2 か月、当時の状況を客観的に語ることができる段階を迎えたように思う。物資もありがたいが、言葉をかけてくれることが嬉しいという。阪神大震災の体験と共通している。

・　元気袋、カレンダーを持参した。どのような配付方法があるのか、受け取っても負担が重くなるのではないかとも思われたが、断ることはなかった。ただし、現地の状況に十分配慮した方法を講じる必要は言うまでもない。

・　被災地との連携を可能にしている一因は、県老連の動きが大きく影響している。

初期段階から被災地訪問と現地の実態把握に努める中で築いた関係が有効に機能し、立ち上がりの意欲を掻き立てている様子がうかがうことができた。

【感　想】

- 広範に及ぶ被災地をサポートすることは困難を極める。復旧の段階から復興の段階を迎え、仮設住宅の整備とあわせて避難所の統廃合がすすむものと思われる。
- 全国からのボランティアがホテルにも多く宿泊し、現地にはバスでの送迎が行われていた。そのなかで、明日はボランティアの仕事がない、といった心配の声が聞こえるなど、ニーズの掘り起こしとの調整が順調でないことが感じられた。
- 被災地では瓦礫の撤去が進むが、更地がどのように活用されるのかの青写真が示されず、いつまでも気持ちの切り替えが出来ないことが最大の課題であろう。
- 岩手県老連は県内被災地を 4 ブロックに分け、全老連と同様の方法でサポート県を設定している。被災直後には困難であった老人クラブ会員の被災状況を調査する段階に来たのではないかとの認識に立っている。各クラブの会員の安否確認を行うことは、今後クラブへの支援、再興を進める上での基礎資料である。
- 行政と同様に、市町村老連機能が完全に崩壊してしまった老連、また単位クラブがダメージを受けた老連など事情は被災地ことに異なる。今後義援金を活用しての支援もその状況を踏まえないと活かされなくなってしまう恐れもある。
- 被災地への外部支援は限界がある。被災地が自ら立ち上がらなければ、国に県に行政に不満を述べることにとどまる。老人クラブの役員は公式の場に出るにはスーツが必要と、何もない中で新調して私たちを迎えた人がいる。名刺がないのでパソコンで作って来た人がいる。不自由な被災生活で我々一行に手作りの菓子を出してくれる心遣いがある。復興はこの小さな意欲や他者を思いやる心遣いから始まっていると確信できた訪問であった。

宮古市老人クラブ連合会仮事務所：金浜老人福祉センター内
山内市老連副会長(中央)から手づくりの郷土菓子が振舞われ、元気袋への御礼と被害当時の話を伺った。また被災状況の説明を柳沢事務局長（左）から受けた。
山内副会長「全国から寄せられた元気袋は、女性部で避難所に届けています。津波警報で急いで避難所に逃げる時、息切れしないで登ってこられました。ウォーキング活動のおかげです。」

山田町老人クラブ連合会：山田町社会福祉協議会玄関ロビー
中村会長（左）、阿部副会長(右)、担当者の出迎えを受け、全国の支援への御礼と合わせて、山田町は津波と火災の被害が大きかったという被災状況報告を受けた。

釜石市老人クラブ連合会の事務所（2 階部分）

当日は横山事務局長の先導で市内の被災地、避難所を案内いただいた。

横山局長は津波に流されて濁流の中、ヘリコプターで救助されて病院に搬送された。

横山事務局長「お見舞いや義捐金も大変ありがたい。けれどこうして皆さんに釜石にきていただいことがうれしい。感謝しています。」